

座談会

聖公会生野センター5年を振り返る

出席者：主教 木川田一郎

司祭 宮嶋眞（聖ガブリエル教会牧師）

菊池邦香（川越キリスト教会）

大川千萬（聖ガブリエル教会）

張東煥（聖ガブリエル教会）

司 会： 吳光現（センター主事）

【1枚のハガキから】

大川：1984年に京都のウィリアム神学館より「聖ガブリエル教会の為に祈ります」というハガキがまいりました。それまでは、「このままではいけない」と思いながらビルの一室を借りて礼拝をしておりました。このハガキに勇気づけられ「教会を再建しよう。生野へ戻ろう！」となったのです。

宮嶋：地域活動センターのイメージが沸いてきたのはいつ頃からなのでしょうか。

大川：城南キリスト教会に行ってからです。木川田主教が「生野に戻るならば地域活動が大事である。」と、そこで地域活動に関していろいろ話が弾み、聖ガブリエル教会として地域の活動を考えていこうという流れになりました。



左より宮嶋司祭、木川田主教、菊池

菊池：管区の関係で言いますと1983年の秋に日韓セミナー準備委員会ができました。その時に、「ちょっと待て、何故、今までの歴史を押さえないで日韓セミナーが始まるのか、その前にやる事があるだろう」という指摘があり、「そうだ。そうだ。在日の問題を全然抜きにしてスタートできん。」それで翌年の6月に2泊3日で在日韓国朝鮮人問題の研修を大阪で行いました。その時初めてガブリエル教会がビルの1室で礼拝を守っているという事を知ったのです。在日韓国・朝鮮人の教会があるという事を皆知らなかったのです。それから歴史の紐解きが始まりました。その後ソウルでの第1回の日韓セミナーに大川さんの発題がありました。

大川：私はあのときは日本聖公会でなく韓国聖公会の立場として参加しました。今になって考えるとおかしい話なんですが……。

吳：大川さんが韓国側として発題したというのが当時の日本聖公会を象徴していますね……。



大川

【聖ガブリエル教会の再建とセンターの開設】

菊池：翌85年、大阪で第2回目のセミナーがありま

した。韓国側がガブリエル教会の再建のためにあの時の金額で200万円の献金を集めて持って来てくださった。それで、200万円というのがものすごい種火みたいなものになり、管区がとりあげたのは88年です。

宮嶋：単なる募金活動でなくて、歴史を学ぼうという姿勢がありましたね。

張： その時、初めてガブリエル地域活動センター（現聖公会生野センター）という名前が出て来たと思います。

宮嶋：当時、全国の聖公会にアピールするために牧師の小崎司祭をはじめとして教会の人が全国各地を訪問されました。そして開設の1年前から、呉さんがスタッフとして入りました。その辺りから具体的なイメージが出てきたと思います。

木川田：個人的には、博愛社の歴史の中で日韓の関係があったと思います。韓国の共生園から博愛社に来ていた人がいました。その人が学校に通う事を援助したり、そういうプロジェクトが博愛社にありました。そういうことを通して差別の問題に気がつかされていったという事と、そういうプロジェクトを推進しなくてはならない。と、そういう事を私は考えていました。

宮嶋：それは今日、初めてお聞きしました。

【センター開設から】

呉： 生野センターの働きは「仕える」というのがベースにあると思います。活動のイメージで「仕える」という事と、もう一つは、「共生」が大きなテーマではないかと思います。ここで開設から今までの5年間を振り返ってみたいと思います。皆さんはこの間の事情をよくご存じの事かと思います。建物ができると同時に教会、保育園、センターの活動が始まったわけです。

宮嶋：やはり呉主事のキャラクターがすごく出ていたと思います。子ども会活動なども最初やりました。でも、気がついたらこの町は老人の町だった。そこから、高齢者に対する関わりがでてくるのです。また、FMサランは生野センターの名前を広めたという意味で大きなとりくみだったと思います。人的ネットワークも、増えていきました。

張： 僕は教会の一員として反省しています。生野

センターに積極的に協力できなかったなあと。

菊池：話が溯りますが、第1回のセミナーのあと、日韓の歴史を学ぶという事を全国的、継続的にやるということで、関東では「日韓の歴史を学ぶ会」というプログラムを1985年から始めました。その後は、関東3教区が中心になって続けられています。ガブリエルを支え、生野センターを支える為に、学びを通して定着した支援体制を創ろうと、それが関東3教区生野委員会へと発展していきました。今年2回の会を継続して持っています。その会は、呉さんに来てもらったり、朴辺山（故人、聖ガブリエル教会員）さんにも「関東大震災と阪神大震災」というテーマで一昨年の秋に来ていただいてお話を伺



張

っています。これは先の話になるのですがそういうセンターが各教区に出来たらいいと思います。名古屋には学生センターがある。この度、神戸にも聖公会長田センターができました。各教会が地域に根ざした教会、社会に開かれた教会でありたいという願いはいまや、定着している感があります。聖公会生野センターに象徴される精神が広がっているのじゃないか。やる内容は地域によって違うでしょう。でも基本的理念、「共に生きる」という事を学ばせていただくという点では本当に感謝しています。ですから教会が生き生きしてきていると感じます。

【様々な人が集える場に】

呉： 「在日コリアン関西パワー」という本に書いたのですが、今の聖公会生野センターのイメージは「誰が集まってもええやないか」だと思うんです。センターの絵画教室の場合は障害児が5名いますが、一人の障害児が来ると、障害児を持つおかあちゃんが、噂を聞いて来るんです。「あそこの絵画教室は障害児も受け入れてくれる」と。昨日も「うちの

子どもは障害児ですがそれでもいいですか」と。「ともかく、1度見学に来てください」と受け入れていきます。ある意味では残念な事なのですが、障害児を受け入れている絵画教室は、うちしかないという事です。うちが誇るというより、この社会が障害者の集う場所がない。この5年間いろいろの人が出入りしたらいいいと思いながら、社会の中で行き場を制限されている人がここに来ているのじゃないのか、そういう意味では、小さいながらも仕えるという点で仕事をしてきたのじゃないかと思います。

宮嶋：教会の礼拝に新たに加わってこられる方は、保育園、生野センターの関係の人も含め、社会の中



呉

で、ハンディを背負っている人が非常に多いですね。教会として特に意識していないのだけれども、保育園や生野センターの影響を受けていて、呉さんが言ったように地域の中ではじき出されている人が来ている。それ自体は嬉しい事でもあり、また悲しむべき事でもあると思います。

【聖公会の中での働き】

宮嶋：生野センターは教区、管区への情報の発信や提言をするという働きもしていると思います。特に大阪教区の場合は在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会が計画した韓国の歴史研修旅行の手伝いをしたり、在日協働のための懇談会を開くときにアドバイスをしています。この在日委員会はガブリエル教会だけが在日の問題を担うのではなくて、大阪教区全体がやらなくてはならない。そういうことを訴えたり、役に立つ資料提供をするなどの、働きをして来て来たと思います。

呉： ニュースは年4回発行の「ウルリム」があります。内容のあるものと思い相当気合をこめて作

っています。一般の人の評判は大変にいいのですが、逆にああいうニュースが反面、片寄っているという評価を受けることもあるわけです。私自身は大切なメッセージを強調するには生野センターは片寄ってもいいと思っています。

宮嶋：「誰が集まってもええやないか」というテーマですが、これからも継続していきたいと思います。いろんな人が関わって地域ができていくわけだし、そういう事にセンターが用いられていったらいい。地域の人で「いい事やっている。生野センター支えてやろう」という人が出てくれば本望でしょう。大阪教区を中心にし、生野の地で、在日の人が支えてくれたり、日本人が支えてくれたり、在日外国人の人が支えてくれたり…。

菊池：一つの課題は財政問題です。支援体制を全国ブロックで作るべきです。個人的な後援会組織も大切ですが、それだけでは限られた人たちだけになってしまいます。関東3教区の面々が集まって定期的に学びの会をしています。継続が大切です。

呉： 大阪教区での後援会を作っていこうというのが、今の一番大きな課題じゃないかと思います。大阪教区は経常会計から100万円を支出しています。他にも多くの人に献金をいただいているのですが、大阪教区で生野センターを支えてくださる方も多分関東での動きはあまり知らない。そういう事とリンクさせながら進めたい。

【センターの課題と夢】

呉： それでは、今後の課題と夢ということでは、課題は先ほどからも出ている事なのですが、まずは財政的な問題ですね、それは生野センターが一生懸命活動して、在日の問題、日韓の問題が日本中の聖公会に広がっていき浸透していくと、最終的には財政問題はクリア出来るのではと思います。勿論財政の為の働きというの必要なのですが、お金集めだけというのは、僕は健全でないと思うのです。そういう辺で活動と両輪という感じで…。

宮嶋：聖公会の他の教会へも通名で行っていらしゃる方が随分いる。自分が在日だという事を名乗りたくても名乗れないという人達は、もっと名乗れるような教会環境になっていけたらいいなと思います。帰化・日本国籍取得をした人が新たな韓国系日本人

として生きて行く姿。また本名で生きていく、頑張っていく、そのどちらもが、あっていいな。生野センターが片寄っているというマイナスのようにも聞こえるけど、大事な所を強調してきたといえる。しかし多様な生き方あるのだと言うことが提示できるような部分があっていいんじゃないか。そのように日本の教会とか、日本の社会が様々な生き方を受け入れるようになると、多様さが安心してさせるように、なって来るのだと思いますが、今のところ日本側があまり多様でないから、センターとしてももっとこうしたらと切り込む所から始まったと思います。

張： 先程、本名、通名という話が出ましたが、ワシは両方使い分けしていますが、果たして、ワシらが本名使う事によって日本人側から見たらどういうメリットがあるか。という事がひとつの問題だと思うのです。またワシらが本名使う事によって、どういうデメリットがあるか、という問題もあります。ワシらが本名使うことは、ワシらの利益よりも日本人の利益の方が大きい。僕は常にそう思っています。本名がエエと言うけれど、実際、本名使ったら、ワシらは不利な側面もある。けれどもどんどん本名、使う人が増えたら、日本人の為には良いと思います。「国際化」というのがすすんでいくから…。

呉：「共に生きる」と簡単に言うけれど、共に生きるというのは、日本人も朝鮮人も、健常者も障害者も、男も女も、みんなが一緒に苦労しながらあって、損得じゃないと思います。我々で恵みを受ける、共に仕えて、共に恵みを受けるという。そういう関係を生野センターは作っていききたい。それが今後の夢ですね。

菊池：ウルリムなんかで、我々が出してほしいという情報は今の言葉なのです。両方にメリットがあるようにするにはどうするか、それをただ投げかけるだけでも、みんな読んで考えますよ。自分達の課題はいくらでも出てきますよ。日本社会を見たときの駄目な状況、だから諦めるのでなくて、それをクリアする為に何をやっていったらいいのか、僕らはその生の声を聞きたいですね。だから「帰化」というのもいろいろな大切な問題を含んでいると思うのです。

宮嶋：本人が決めるのだけど、それが本当に本人の自由な意志で決められたらいいなというのだけ

ど、いろいろな圧力の中で選ばなくてはならない。そういう風に追い込まれて行くような社会では困る。生野センターとしては、そういう意味で大きな流れの中にある小さな声を大事にしていく、そこを大事にしていこう。沢山の意見、大きな意見というのは、それなりに主張が出来る。そうでない声を発掘する。そこに耳を傾けて行く。それを地域の中でやっていく。様々な課題に触れて、私たちの道が提示され、夢が見れると信じています。

呉： 今後の生野センターの“夢”が少し見えてきたと思います。ありがとうございました。

(編集・文責：編集部)



この座談会の全文は大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会からブックレットとして出版されます。

ちょっとひと息①

사공이 많으면 배가 산으로 올라간다

船頭が多ければ船は山に登る。

ものごとに干渉する人が多ければ、かえって思いのほか失敗するという意味。

時のしるし

「共生」という言葉がはやりだして

どのくらいたつだろうか。インターネットの某検索エンジンでこの言葉を検索してみると、何と933件もヒットした。市民団体のホームページから、企業の宣伝に至るまで、まさに流行語と化してしまった「共生」。真の「共生」とはいったいどういう意味なのだろうか。

生野センターや、大阪教区の在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会は、いつも「共に生きる」ということを標榜してきた。私も、人から協働委員会の目的を問われて「共に生きる社会の実現のため」などと決まり文句で答えてきた。しかし、「共に生きるってどういうことか」とその先を問い詰められると、何も答えられない自分がそこにいる。そこまで突っ込んだ質問がなかったのをいいことに、いい加減に通り過ぎてきたのである。

「共に生きる」とはどういうことなのか。ほんとうは難しく考える必要もない単純なことのはずである。立教大学の栗原彬教授は、綿密な社会学的分析もされた上で、「共生」とは単に living together のことだという。つまり、「共生」とは、その文字通りの意味以上のものでも以下でもないのだ。

共生をイメージするのに、私がいつも例に出すのが、沖縄のチャンプルーとハワイアン・レインボー。沖縄に、チャンプルーという料理がある。ごちゃ混ぜにした炒めものである。たとえば、ゴーヤーと豆腐とポークと玉子と、とにかく一緒にして混ぜて炒める。でも、ソースのようにひとつになるわけではない。各々がその形を保ちながら、ごちゃ混ぜになっている状態。これがチャンプルーだ。

そして、ハワイ名物の美しい虹。虹はご存じの通り七色で決して混じり合ってひとつの色になることはない。しかも、どの色ひとつ欠けることなくそれぞれ美しい光を放っている。もちろん日本の虹も同じように美しい。でも、なぜハワイアン・レインボーに「共生」のイメージを感じるかというと、ハワイは今、先住ハワイアンたちが文化復興の機運を盛り上げつつある多民族複合文化の島々だからである。

さて、今の日本の社会を考えてみると、それはチャンプルーではなく、ひとつの強力な食材が他の弱い食材を吸収してしまっ、ひとつのソースになろうとしている状態であり、レインボーでいえば、ど

共生

るか強い色が他の弱い色を吸収して一色になってしまうような状態である。「共生」とはほど遠い状態なのだ。しかも、おそろしいことに、このような日本の社会では「共生」すら「同化」の論理に取り込まれてしまう危険性がある。「共に生きる」んだから、少々のことはがまんしろよ」「ここは日本なんだから、共に生きるためにはそれに合わせろ」ということになってしまうのだ。「共生」は、違いを違いとして認め合って、その人がその人本来のままで共に生きていけることをいう。その人が、その人のもっている本来のものをかき消すことによって、他者とうまくやっていくのが「共生」ではない。

「共生」について考えるとき、私はいつも四つのキーワードを視点にしている。寛容、平等、自立(律)、責任の四つだ。いずれも共生社会実現のための必要条件としての意味合いをもつのだが、字数の関係で、四つ目の責任についてのみ記す。

在日韓国・朝鮮人と日本人との共生というとき、日本人は彼らに対して大きな責任があることを認識せねばならない。日本人には、彼らの存在自体に大きな責任があると同時に、彼らに対して今なお苦痛を強いているという二重の責任がある。税金を要求しながら、選挙権を認めない。外国人登録証というものを常時携帯させて緊張と不安を強いる。……その他たくさん。このような現実に対して、日本人は行政の問題と片づけてしまうのではなく、その行政は自分たちが作ったものだという意識で、自らの責任を問うべきだろう。過去の歴史的出来事に対しても、それに対する責任を遂行した上ではじめて「共生」が可能だということになる。そのような責任意識のないところで、在日韓国・朝鮮人との共生、アジアとの共生といったところで、それは絵に描いた餅でしかない。絵に描いた餅は人を傷つけることはないが、こちらの方は人を傷つけ続けるのだから、さらにたちが悪いといえるだろう。

今秋、大阪教区で予定されている宣教協議会は、このような「共生」社会の具体的な実現に向けての第一歩として、まず自らの歴史を振り返り、その歴史に対する(神と人に対する)責任を果たそうとする営みであると信じる。

(まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒 大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員)

松山 献

日韓キリスト教史と祈り

井田 泉

このところ藤岡信勝氏らによって「自由主義史観」なるものが声高に唱えられています。彼らは日本の近・現代の歩みの誤りを真実に受けとめていこうとする立場を「自虐史観」「反日史観」とのしり、「日本はそんなに悪くない」「子供たちに日本人としての誇りを持たせよ」「もっと『元気の出る』歴史を教えよ」と叫んでいます。しかしこのような歴史の自己正当化からは決して何も良いものは生れません。

今日私がお話したいことは、日本が植民地として朝鮮半島を支配したその時代の後期、朝鮮のキリスト教会がどのような祈りを捧げていたか、また同じ時代に日本の教会がどのような祈りを捧げていたか、ということです。そしてその事実は今日の私たちに何を呼びかけているか。それを皆さんと一緒を考えてみたいのです。

＜日本による朝鮮植民地支配と 神社参拝の強制＞

明治維新以来、日本は「富国強兵」を掲げて、天皇を中心とした国家の建設に力を尽し、さらに国外に向かって勢力を拡大していきました。1910年、日本は「日韓併合条約」を韓国に強制してこの国の独立を奪い、植民地としました。日本は国家の繁栄と海外への侵略のために、徹底的に朝鮮を利用しました。米も鉱山の資源も、人も、あらゆるものを日本の利益のために搾り取っていきました。学校を建て、鉄道を敷き、ダムを建設したのは、その目的のためです。学校教育の中では、「朝鮮人は能力が低い」「朝鮮は自分の力では発展できないから、日本が助けてやるしかない」などととんでもない誤りを教えました。朝鮮の人々から誇りと自信を奪っていったのです。

日本の不当な支配に対する朝鮮の人々の憤りと民族独立への熱望が爆発したのが、1919年の三・一独立運動です。

1930年代半ばになると、日本の大陸における戦争遂行のため、朝鮮はその「兵站基地」とされました。朝鮮の人々を“天皇陛下”の忠実な臣民にするための「皇民化政策」の中で、特に朝鮮のキリスト教系

学校にとって、ついで教会にとって大問題になったのが神社参拝の強制です。朝鮮の教会は早くから朝鮮の人々の魂の拠り所として、民族と民衆の間に根を下ろしてきました。教会なら人が集まることができる。自分たちの言葉で話すことができる。民族の独立を失った悲しみをともに嘆き、ともに救いと解放を神に祈ることができる。——これが朝鮮の教会の伝統でした。このようなキリスト教会が日本の支配にとって邪魔であったことは当然です。そこで総督府は、教会から民族意識を一掃すること、抵抗する教会や信徒・牧師はたたき潰すことを企てました。このためになされたのが、キリスト教会に対する神社参拝の強制です。これは朝鮮の教会に対し、民族的屈辱と信仰的屈辱の二重の屈辱を強いるものでした。



特に朝鮮の最大の教派である長老教会では反対が強く、それだけ総督府の圧力もひどいものでした。

1945年の解放の日までに、神社参拝問題で閉鎖に追い込まれた教会が200余り、捕えられて投獄された人が2000名余り、獄死した人が50名余りと言われます。なおこの頃までに朝鮮全体で1000を越える数の神社、神祠が建てられていました。

忘れてならないことは、日本のキリスト教の指導者が朝鮮の教会に対し神社参拝を受け入れるように説得活動を行なったことです。1938年6月、日本基督教会大会議長富田満は、朝鮮の長老教会に対して神社参拝を受け入れるようにと説得活動を行いました。その会場となった教会の一つは、平壤の山亭峴（サンジョンヒョン）教会です。この教会の牧師は、神社参拝反対運動の指導的存在であった朱基徹（チュ・ギチョル）です。彼はその前夜に警察から釈放されたばかりでした。富田の説得に対して朱基徹は厳しく反論し、富田を追及しました。

＜山亭峴教会と朱基徹牧師の祈り＞

1938年9月10日、イエス教長老会第27回総会は神社参拝を決議しました。約200名の総会議員・代議員の間に約100名の警官が座って威嚇・監視するという異常事態の中で決議がなされたのでした。神社参拝

反対派は事前に逮捕・拘束されていました。神社参拝をさせるために日本の警察がいかに全力を傾けたか、ということは、当時の警察の責任者自身の言葉から明らかです（富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係史資料II』新教出版社、参照）。

神社参拝に反対して総会前に捕えられた山亭峴教会の朱基徹牧師は、1939年の2月4日、半年ぶりに釈放されました。平壤駅に着いたのは翌2月5日、日曜日の朝でした。彼はそのまま、自分の教会に向かいました。山亭峴教会は2000名を越す会衆で溢れたといえます。三つの警察から派遣された刑事たちが教会を取り囲み、礼拝堂の中に陣取って監視していました。彼は「五つの私の祈り」という説教をしました。涙なくしては読めない説教です。

「この朱牧師が死ぬからといって悲しまないでください。私はわが主のほかには、別の神の前にひざを屈しては、生きることができません。汚れて生きるよりはむしろ死んで、主に対する貞節を守ろうと思います。主に従って、わが主に従って死ぬことは、私の祈り、私の願いです。」

拷問による衰弱の果て、彼が平壤刑務所で息を引き取ったのはそれから5年後の1944年4月のことでした。山亭峴教会は強制的に閉鎖されました。

＜日本聖公会東京教区紀元節大礼拝および 長期建設精神作興大阪教区特別祈願式＞

ところで朱基徹が死を覚悟してあの「私の五つの祈り」の説教をし、会衆とともに泣いて礼拝を捧げたその同じ時期、日本聖公会ではどのような礼拝が捧げられていたのでしょうか。1939年2月11日、日本聖公会組織成立記念日に、東京教区では「各教会合同紀元節大礼拝」が捧げられました。天皇の長寿と国家の繁栄を祈り、そのために「献身犠牲の精神に活き」ることを誓うものでした。あの朱基徹牧師と山亭峴教会の姿とあまりに対照的ではないでしょうか。（詳細は聖公会神学院の『神学の声』第33巻に収められている拙稿『基督教週報』に見る紀元節大礼拝』をご覧ください）。



同じ日、「長期建設精神作興大阪教区特別祈願式」が行われました。当時の『基督教週報』は入堂プロセッションの様子を伝えています。聖公会生野センターの母体である聖ガブリエル教会の創立者、張本栄（チャン・ボニョン）先生、本来の名は張準相（チャン・ジュンサン）先生（当時、執事）が日の丸の後ろを、十字架を捧持して進まれた。日の丸に象徴される日本の国家権力は、張先生に苦しみを、また朝鮮本国と在日の人々に苦難を負わせ続けていました。日の丸の後ろを、十字架を掲げて歩んでおられた張準相牧師の姿は、日本国家と日本聖公会が不当な重荷を負わせていたことの象徴ではないでしょうか。しかし同時にその姿は、先生が同胞の救いと日韓の本当の和解のために、十字架を負っておられた姿でもあったのではないかと、そのように思われてなりません。

紀元節大礼拝のみならず、当時の日本聖公会は戦争協力の祈りを重ねていました。そこにも多くの苦しみがあったことと思います。しかし私たちの教会が隣人に苦難を強いる祈りをしていたことは事実です。日本聖公会に属する者が、過去の誤りを一緒に嘆いて、悔い改めて再出発したい。覆い隠したり自己正当化するのではなく、悔い改める者に新しいいのちを与えてくださる方を信じて、新しい道を歩みたいと思うのです。

1995年に日本聖公会は宣教協議会を開きました。そこで私たちは私たちの教会の犯した誤りを見つめ、悔い改めと新しい歩みを決意する共同ごんげを捧げました。翌1996年5月、日本聖公会第49（定期）総会は、宣教協議会を受けて「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議しました。

「もし、あなたが真実と公平と正義をもって／『主は生きておられる』と誓うなら／諸国の民は、あなたを通して祝福を受け／あなたを誇りとする。」 エレミヤ4：1－2

歴史の真実な反省から、神様の新しい召命にこたえる教会の歩みが可能とされると信じます。

（いだ いずみ 聖公会神学院教員）

この講演の全文と朱牧師の説教「私の5つの祈り」は大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協議委員会よりブックレットとして出版されます。

芸人という仕事、チャリティという現場

趙 博



◆ 縁、その1

呉 光現さんと初めて逢うたのは...もう忘れてしまったなあ。確か、「光州事件('80)」の直後か、生野民族文化祭が始まる直前やった。改めて考えてみると15年以上のつきあいやね。ほんで、指紋押捺反対運動の際にも、聖公会生野センターができる時も、FM サランが開局するときも、なんやかやと一緒にさせてもらってます。ワタイは一応<西成の出>だけど、この35年、京都・西成・堺・西成・神戸・西成・尼崎・西成と転々としましてん。結局、今の連れ合い(金 君姫)と所帯を猪飼野に持ったのが12年前。光現さんは生粋の猪飼野人でワタイは根無し草やから、「地域」いう言葉は、光現さんには似合いまっけどワタイはあきまへん。てなこと、「活動」にも”スタンスの差”っちゃうのが出まん。ワタイは機動戦、光現さんは陣地戦....あつ、これはもう死語ですわ。

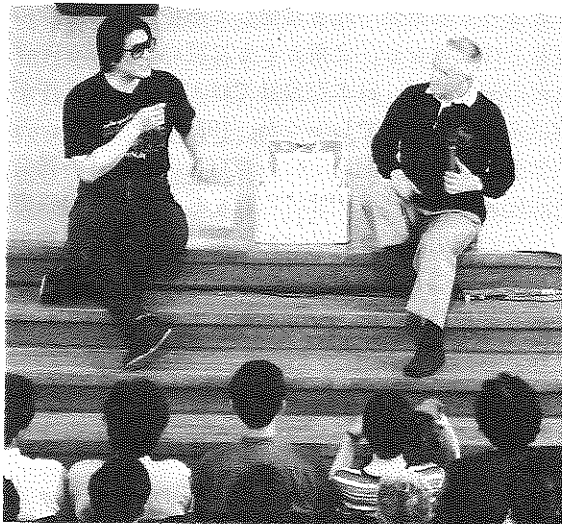
◆ 縁、その2

金 成亀さんと初めて逢うたのは、忘れもしまへん1982年の春、当時の「教科書問題」(「侵略」を「進出」と書き換えて、アジアの民衆と国家から日本政府・文部省へ非難轟々の抗議が来た)に対して何か対抗イベントをやろうと準備中の時でした。ほんで、当時まだできたの『バナナ・ホール』を借り切って、「怨歌で綴る、日朝・日韓の歴史」なるリサイタルをやりましてん。趙 容弼もまだそんなに知られてないころでっせ、先見の明があったと言うたらエエ格好になりまっけどな。成亀さんはそのステージで「これからは本名で音楽活動します」と宣言しは

りました。カッコよろしおましたで！その後も民族文化祭の「ノレ・チャラン (のど自慢)」のお手伝いをしていただいたり、ワタイのCDの録音、ライブ etc. いつもお世話になりっぱなしでおまっ。去年「社会人入試で大阪教育大学に入ったんや、この年で学生や。」と嬉々として語ってられたお顔、ほんま、写真撮つといたらよかったなあ。<一流ミュージシャンは、哲学者である>——逆に、哲学しないものは一流ミュージシャンにはなれまへんねん(哲学したから言うて一流ミュージシャンになれるとは...限りまへんけど)。金 成亀さんとの共演はワタイの夢やと、一応、己の秘密を告白しときます。

◆ 縁、その3

何回もお目にかかりながら、牧口一二さんとちゃんとお話したのは、1994年の秋でした。第一回目の<ニッポンて何やねん？セレブレーション・コンサート(愛称：セレコン)>の準備中に、河合塾で講演をお願いしましてん。これが大好評で、河合ブックレット『何が不自由でどちらが自由かーちがうことこそばんざいー』という本になってます(まだ読んでない人は是非読んでください、読まんと一生後悔しまっせ)。ちょうどこのブックレットの出版の準備中に、あの大震災ですわ。牧口さんはいち早く「ゆめ・風10億円基金」構想を立て、その旗揚げにフェスティバル・ホールでコンサートやりまして



ん。大阪フィル、紙ふうせん(後藤悦治郎&平山泰代)、趙博というエも言われん組み合わせ(ワタイは映画『おくおく夢がわいてくる』の主題歌を担当した縁で出させてもらいましてんけど、この映画をまだ見てない人は是非見て下さい、見んと一生後悔しまっせ)。ほんで、この時の司会が永六輔さんでした。吹田の「おくおくの会」代表・村脇さんも大フィル相手にタクトをふりました。(その甲斐あって、クッキーは完売！) 牧口さんとはその後も、時に触れ・袖触れ合って、ごちゃごちゃと一緒にさせてもらってます。牧口さんの所属する聖公会、ほんま、今回はお世話になりました。

◆ 縁、その4

<風あれ、河あり、人の間に光あれ！>——1997年6月1日を、誰かが日本の芸能史に書き残してくれるやろか？——そんなおこがましい気分もエエヤンカ、と思えるほどの大盛況でおましたなあ。笑福亭伯鶴さんも突然舞台上げられるわ、「進行」の段取りはあって無かったような始末。すべてアドリブの見事さでおまっ！マルセさんの芸は言わずもがな、永さんの絶(舌)妙なしゃべくり、成亀さんのベース....ほんで、ワタイの知り合いは、おそらく200人は来てたはず(もちろん、皆さんの共通の知り合いも含ん

で、でっせ)。終わってから「あの日、行ったで」という人、「行きたかったのに...悔しい！」という人、同数ぐらいで何人もの人に声かけてもらってます。ということは、あの日1,000人以上のお客さんが来てくれはったんやけど、実質その倍、いや、もっと・もっとぎょうさんの人らが、<心>を寄せてくれはった、ちゅうこってんな。チャリティという言葉は少々手垢に汚れてはいるけれど、実行委員会・出演者・裏方の音響照明スタッフ、そしてお客さんの心がピタッと重なった時、ホンマの<チャリティ>ができまんねんなあ。何もかも上手く行った、いや欠点を隠して余りある成功——それは何よりも<心根>の広がりがあるこそ、でんなあ。

今回のチャリティで一番<得>したんは、実はワタイでんねん。なんせマルセさんの芸の、すぐ横に何時間もおれたんですから。永さんと、<かけあい>なんかさしてもろたんでっさかいな、成亀さんのベースで歌わせてもろたんやから...。芸人の至芸——それは人の縁が産んでくれる、そんな気がしてきました。ほんま、おおきに！また、やりまひよ、いや「またやらしてもろて、よろしおまっしゃろか?!」「やんなはれ。聖公会だけに、今度も成功するで。」...はあ〜、さいなら。

(ちょう ぱく)



「趙 博 ライブ予定」'97サマー・ファイト・シリーズ

8月22日(金) 河合塾大阪校「温故知新シリーズ」 午後5:00〜

30日(土) Pak's Groove (新大阪駅近く) 午後7:00〜

9月6日(土) 大阪府中央図書館ホール(東大阪市・荒本)

「東大阪国際識字デー・市民の集い」 午後1:30〜

12日(金) 兵庫県立鳴尾高校(西宮市)

▲お問い合わせ：詳細は——OFFICE 38° TEL 06-977-2766 FAX 06-977-3101

女性の立場から

尼子美喜

世界のあちこちで、紛争等での貧困・飢餓その他多くの災いや家庭崩壊がおこっております。反面日本では物が満ち溢れ、物を粗末にする傾向になってきていますし、私たちの近くで小中学生の事件が続々とおこり、心を痛めつけられるこの頃です。

このような時にあの大震災から今尚立ちなおることの出来ない多くの人たちのおられる、神戸の地、六甲で大阪教区宣教協議会が「**私たちは誰の隣人となってきたか**」—21世紀の宣教のために—の主題のもとに開催されることに私は関心を寄せています。

私はクリスチャン3代目として教会に関わってきました。明治の時代、宣教師より初めてキリスト教に触れ、信仰をもった祖父母たち、戦中・戦後の困難の中で信仰を持ち続け、育ててくれたのは両親。しかし私は当時の教会でどのようなことが起こっていたのか聴くこともせず、深く考えることもせず過ごしてきましたが、年齢と共に世の中のことを知る目を養い何を大切にするか、少しは気付かされてきました。

今教会に属する人の中で女性の数は男性を上まわっていますが、教会委員会・教区代議員、その他多くの会合に女性の数はあまり多く見かけません。多ければよいと言うものではありませんが、雑事に負われ出席する機会が少ないのは現状だとは思います。

私自身もそうでしたが会議やむづかしいことは男性にまかせておけばよいという人も多かったように思います。

もっと教会での話し合いや協議会に参加しましょう。身近な事をわかりやすい言葉で話しませんか。女性のもっている優しさで、皆が響き合う会合になってほしいと願っています。

今に生きる私たちがこのような荒廃した世の中で何を大切に日々を過ごすことが出来るかそして次代の子どもたちに信仰を引き継いでいく責任を多くの方々と共に考えていきたいと思います。

21世紀に生きる教会のことを考える時を与えて下さった神に感謝すると共に大阪教区宣教協議会が実り多き会でありますように願っています。

聖霊よおいでください

世界を新たにしてください

つくりかえるあなたのいのちから

風と炎を送ってください

そして今日の世の中に

教会を立ち上がらせてください

知恵と信仰を与え

私達が招かれている

大きな希望に気づかせてください

(あまこ みき 高槻聖マリヤ教会員)



イラスト：久保麗子（芦屋聖マルコ教会）

ちょっとひと息②

사람의 새끼는 서울로 보내고, 마소의 새끼는 시골로 보낸다

人の子は都に送って、牛馬の子は田舎に送る。
人間は都会で育てばいろいろと見聞きする事が多くていいが、牛馬は田舎に行けば食べるものが多いという意味。

トータス・ハウス半年です。

まだまだ“？”いっぱいですが……がんばってます。

川上 由夏

昨年の10月にトータスハウスが開所した時に、大切にしたいと思った事は、『作業に追われないこと』『メンバー主体のものであること』『地域に開かれていること』などでした。半年がたって、(この半年が微妙で、ある人達はもう半年“も”といい、私たちはまだ半年“しか”と思う)振り返ってみると、とりあえず『作業に追われないこと』は出来ているかな?物作りはやっていますが、がんばっちゃう人と、のんびり気の向いたときだけやってる人と、なーんにもしたくない人とが混じり合って、まあまあいいムードかな?と思っています。

でも『メンバー主体』ってどういう事なのか、『地域に開く』って何をやる事なのかはよくわからないのも事実です。それが大事だ、必要だっていうのはありますが、どうすればメンバー主体なんだろう?確かに設立準備の時から当事者も参加して、運営委員にも入っています。だけど、ミーティングを頻回に開いてみんなで決定をしたいと思っていたのに、自分の忙しさやメンバーが揃わないこと、参加したくない人がいることで、毎週が隔週になり、今は月に一回がやっとです。色々な機会や経験を持ってもらいたいと思っても、行きたくない人を無理に誘って

講演会や研修に行くことが、『メンバー主体』っていうことなんだろうか?と迷いがいっぱいです。

それからもう一つの『地域に開かれる』ってこと、私自身は生野で知り合いがいっぱいできたけれど、本当のお隣さんとか同じマンションに住んでる人ってあんまり知らないし、あいさつだってほとんどしない。これから何をしていけば地域に開いて行くことになるんだろう?

でも6月1日の聖公会生野センターの5周年記念公演では、不安な気持ちでの共催だったんですけど、ジュースも作った物もたくさん売れて、「こんにちは」「いらっしやいませ」と笑顔でチケット切りだって出来たし、みんな疲れていただけうれしそうでした。

これは、きっとすごいことじゃないか?と思います。

ここであの微妙な半年を“も”とするか?“しか”とするか?が問題になってくるんです。この先も1年、2年……5年、10年といつまでも“も”と“しか”で考え、迷い続けて行くのかもしれませんが。

(かわかみ ゆか トータス・ハウス施設長)



韓国の結婚式レポート

今西 豊行

ソウル到着の翌日。友人の結婚式。会場は、新郎側・新婦側に別れ各自好きな席に座る。祝い金はしたい人だけのシステム。私は小さな卓上離人形セットをお祝い金代わりに渡す。牧師さんのような人が前に出て新郎新婦に対して何か言っていた。最後は記念写真で締めくくり。Buffet スタイルの食事、各自で済ませ終了。メニューはブルゴギからお刺身までバラエティーに並ぶ。赤飯が日本のように赤色じゃなく、小豆が大きかったのが一番印象に残っている。

< 2 次会 >

近くの居酒屋さんを借り切って新郎・新婦の友達が集まり、再び祝福の乾杯。男女男女の順で座る。どこにでもいる仕切りたがりの男がなにやら始める。お酒が入り機嫌よく&怪しい韓国語を使って話していた私が突然指名され「御結婚おめでとう。いつまでも温かい家庭を築いて下さい。」と韓国語で言って拍手をもらう。そして時間は流れ……。

最後にビールが半分入ったジョッキが2つ。その中に乾きもの・コーラ・しょう油になぜかタバコが無理矢理入れられ、新郎新婦が一気に飲み干してしまわないといけない儀式。想像するだけでも「オェ〜！」なのに新婦が「韓国に来た記念に飲みなよ」と言ってきた。もちろん私はお断り。30分後、悪酔いをして、3次会以降ダウンしていたのは言うまでもない。

< 3 次会・4 次会 >

韓国人は歌が好き。ノルバン（カラオケ）へ行き3室また借り切り。座るなり「豊行さん トラフヨブサン（釜山港へ帰れ）歌えるよネ」と言われた。「そんなおじさんの歌はきらい。」と言っているうちに突然ピンゲのバラードになると男女のカップルで踊る。4次会まで私の下手で怪しい韓国語を一生懸命聴いてくれて一緒に踊ってくれた女性どうもありがとう。

時は7:30PM。お食事タイム。ブルゴギを食べ、大酒を飲み、何かの話で盛り上がるグループ。花

※今西豊行さんは3月まで聖公会生野センター韓国語教室の生徒でした。1年間の予定でソウルにある西江大学で韓国語を勉強中です。(編集部)

札をするグループ。再び歌を歌い出すグループ。結局私が下宿に戻ったのが、11:30PM。ソウル到着2日目にして夜遅く戻ってきた私に「非行留学生」のレッテルがしっかり貼られたのは言うまでもない。

< お酒の席での韓国人観察記 >

韓国人がお酒の席となると談論風発というより激論爆発の実弾演習場となる。頭から煙が立つ。焼酎と唐辛子を燃料として雷鳴がとどろき、稲妻が走り、雲は怪しく駆け抜ける。そして韓国名物ツバキが空を飛ぶ。まあどおしてあんなに話することがあるのだろうか。あわれな日本人（私）はタコツボの中でふるえて重戦車軍団の合戦をながめているコンジョーのない観戦武官のようである。

断るまでもないが、すべての韓国人がそうであると言っているわけではない。



前列左から2人目が今西さん

レポート第1回はいかがでしたか？できるだけ一留学生が、普段着のソウルで観たこと、聞いたこと、経験したことをウルリムを通して、少しでもたくさんの人に知ってもらいたいと思う。なぜなら私たち日本人と韓国人は、お互い知りもしないのに偏見を持ってぶつかり合い、つらい思いをすることも多いから。少しでも、この溝が埋まればと思います。

(いまにし とよゆき 現在ソウル留学中)

連載マンガ④

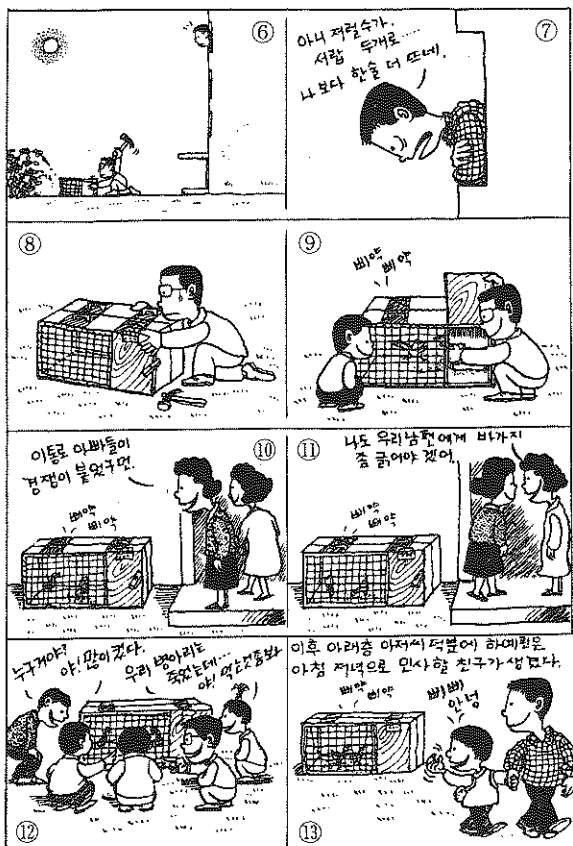
나보다 한술 더 뜨네

(僕よりすごい人がいる)



- ①誰がこんなに使えるものを捨てたんだろう
不燃性 可燃性 (紙・ビニール・廃棄物)
④あの引き出しもまだ使えるのに
⑤この頃はまだ使えるものを何で捨てるのかな？

- ⑦あら、引き出し2つで僕よりすごい人がいるわ
⑨ピョピョピョ
⑩この通路のパパたちは競って… ピョピョピョ
⑪うちの人も少し言っておかなくっちゃ ピョピョピョ
⑫誰のだろう。大きくなったねえ。うちのひよこは死んじゃったけど…。やあ、食べているのちょっと見てごらん
⑬この後、下の階のおじさんのおかげでハエリンは朝夕に挨拶できる友達ができたね。ピョピョピョ、ピビ、こんにちわ



作者：崔正鉉 (ちえ・じょんひょん)
パンチョギ(もう一方)の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第1回平等夫婦賞受賞。

大阪考②

高二三

小説『A V・オデッセイ』

(元秀一著 1997年、新幹社刊)

定価：本体価格2000円＋税

作家の梁石日（ヤン・ソギル）さんが『A V・オデッセイ』を評して「在日文学といえば、アイデンティティーに悩むくそまじめな主人公が通り相場だが、ここにはじめて、ど助平な主人公が登場した。それだけでもこの小説は今後、何かを期待させる」（『朝日新聞』1997年6月29日「読書欄」）と述べた。実は梁石日さんがこの作品をもっと読み込んでいたならば、違った表現がされたのではないかと思っている。つまり「ど助平」なのは表面的なだけであって、作家がめざそうしていたのを書くためには、「ど助平」な主人公にしなければ平衡が保てないほど、深刻でリアルな私たちを取り囲む政治情勢があるからこのようにしか書けなかったのだ、と。元秀一（ウォン・スイル）さんは「あとがき」でも一言もそんには触れていないが、作品を読んだ人ならわかっていただけのだろう（という世代の人がいるだろう）。

二、三年前、一世を風びした「月はどっちに出ている」という映画がある。原作は梁石日さんで、在日世界を日本人にも開放した先駆的な役割を果たした作品だと思う。「在日」にしか理解しえないと思われていた生活世界を、とても人間臭く魅力あるものとして描き、日本人社会に受け入れられた。出版者ふうな言い方をしたら、市場（マーケット）を開拓したとでも言おうか。しかし、それでもちょっとだけ感じたことを言わせてもらおうと、それは1960年代、朝鮮学校を卒業した人たちのノリで意識世界が底流に流れていたように思うのだ。しかも東京の在日の原点でもあり得るのだが、ちょっと古い、というのが率直な印象だった。

それでは元秀一さんの『A V・オデッセイ』はというと、1970年代、在日韓国青年同盟（韓青同）や

在日韓国学生同盟（韓学同）を体験した人たちの意識世界を底流にしている、そのぶん深刻で政治的なのである。しかし大阪のノリ。大阪生まれで大阪育ちのサービス精神旺盛な元秀一さんは李恢成さんの「見果てぬ夢」のような作品は書けなかった。そのサービス精神（表紙が裸婦像にみられるように）が作品をよりリアルに伝えるために成功したかどうかは共犯者（本を出版した）の私には何とも言えない。しかし、限られた人に手に取られるだけでなく、より多くの人に読んでもらいたいという気持ちだけはよく現れていると思う。

ちょうど10年前、元秀一さんは『猪飼野物語』（草風館刊）と言う本を出している。私はその本のしおり「くさのかぜ」に短文を寄せたが、そこで「猪飼野から出発して、そこにこだわり続け、そして、そこを超えようとするときにこそ元さんの本当の力が問われるような気がする」と書いた。それは元秀一さんとはじめてあった時、彼がジョイスの「ダブリンの市民」のことをしきりに語っていたからだったが、本当は猪飼野をずっと書き続けてもかまわなかった。しかし元秀一さんの作品スタイルで猪飼野を書き続けるのはずいぶん苦しむにちがいない、と思った。なによりも元秀一さんの周りにいる大阪の読者たちが簡単に合格点を出すはずがないではないか。いつでも作品世界よりも面白い人生を生きている人々の眼には厳しいものがある。柳美里（ユ・ミリ）の「アボジが娘の小説を読んで、自分ならもっと面白く書く、と言ったような世界があるのである。

名前も知らない作家の小説を読むのには勇気がいる、と知人が言った。もし、つまらない小説だった場合、本代をドブに捨てる勇気のことだろうか、それとも、取り戻せない時間を捨てる勇気のことだろうか、と考える。しかし、批評は作家を育てる。悪評ほど。名もない作家が、名もない出版社で本を出した。今のところ好意的な批評が多いのだが、知人たちがしか読んでいないからだろうか、と少しばかり不安である。（こ・いーさむ 新幹社代表）

小説『A V・オデッセイ』は
聖公会生野センターでも取り扱っています

聖公会生野センター賛助者ご芳名

1996年4月1日～1997年3月31日（順不同・敬称略）

ご支援ありがとうございました。紙面の都合上、複数回のご献金者が多くいらっしゃいますが一度の掲載にさせていただきました。ここに名前のない方もたくさんいらっしゃいます。各教会・教区でとりまとめてくださった方です。その方々にもここで感謝の意を表したいと思います。

【後援会】

武市温子 春名英夫 新木裕香子・千智 木下廣子 金京美 久保まゆみ 黒田順嘉 全英子 韓裕美 良原知子 山根由香 金宮春子 北村春子 久米奈美枝 鄭炳薫 菅原与志一 橋本浩清 佐藤真也 洪彦義 池ノ内隆二 納トヨ 稲原三千 小林満寿子 青柳美智子 景山恭子 森中央 久保潤豊彦 小泉雅紀 筑田克夫 山本登 高橋季代子 小林正 島田麗子 川上竹治 栗山義信 福堂佳子 高宮建治 小林克則 岡本勝 飯田修 奥康功 笠原都由子 蔵田雅彦 後藤真 小西正人 高橋幸子 恒光兼介 内藤昇 中島路可 仲村實明 中村大蔵 吹留辰雄 福井真紀子 宮嶋泰夫 森田斉子 山下直子 吉井清達 京都教区教務所 黄裕錫・金幸子 中野香津子 辻本敏子 植田哲子 松本一郎 石橋泰治 鬼本照男 久保道則 高田茂登子 名出望 仁尾真理子 松山龍二 古本恵一 エリザベスサンダースホーム 須佐美浩一 山崎ホシ子 泉迪子 大黒清一 奥田哲夫 小林聡 清家智光 濱口幸子 飛田雄一 山影千代 山口佐栄子 藤谷正一 畑野栄一 神戸聖ミカエル教会 秋山義孝 大山仁躬 高田須磨雄 永嶋大典 裴薫 芳我秀一 松本正俊 八幡明彦・秋山幸美 大野寿美 荻本十四年 高見澤國子 大川千萬 木川田一郎 山本勝彦 石橋聖トマス教会 大北光男 浅野芳彦 石井義雄 西村逸郎 特別養護老人ホームふれ愛の家 香山よしの 越賀智恵子 佐山みち江 大谷タカコ 斎藤美枝 小林尚明 張聖子 塚田理 直川義人 加納実 古本純一郎 植松從爾 荒川百合 北山和民 磯晴久 橋本禮子 橋高紀雄 牧野恵美子 今中喜子 佐野信三 代谷宣子 諸橋保夫 川村直子 後藤一郎 小室一 井田泉 植松誠 聖ミカエル兵庫幼稚園 真鍋倫子 大野和香子 松山献 越山健蔵 近澤淑子 岡野利治 倉本和 辻本秀子 藤間孝子 武藤六治 梶原史朗 高橋敏子 吉田常夫 旅路の里 べんぎんべり館 桜井揚子 河野裕道 牧野道信 宮嶋公恵 宮嶋眞 ことつじ乳児保育園 軽井沢ショー記念礼拝堂 小倉眞市 谷川幸枝 井出一志 谷富夫 今井雅雄 猿橋靖・正子 鈴木恵 尹文嬉 張東煥 松居勲 林豊・崔七枝 茶本博史 聖バルナバ病院サマリア会 笹森田鶴 辻文雄 大野和歌子 八尾恵三 瀧山恒雄 中原恵 東直子 東敏勝 今川宏子 新村隆一 大音智恵子 香川一憲 水波淳 江野隆夫 宇野徹 伊勢田健 北関東教区 太田喜元 宗像和雄・千代子 アトリエIK 佐治孝典 片山春美 坂本春夫 小松幸男 飯島正 森一郎 井原洋子 前田忠男 藤原紘子 小野綾子 尼子ユリコ 松岡慶一 木田江悦子 大阪聖アンデレ教会婦人会 聖公会大阪教区婦人会 竹中達吾 良善幼稚園 山本眞 福岡教会婦人会 前島素子 康愛子 一花恭子 竹林徑一 佐藤悦子 小野田芳大 竜田宏美 東京教区 松原恵美子 渡辺晴男 堀武 堀江育夫 林芳子 池住圭 生野センター横浜教区友の会 山野繁子 洪佳頭 岩井梅代

【クリスマス献金】

高橋季代子 岸本健次 山根由香 池ノ内隆二 小林正 辻文雄 伊勢田健 佐治孝典 小野綾子 納トヨ 黄裕錫・金幸子 真鍋倫子 山口光 稲原三千 小林満寿子 中野香津子 高見澤國子 荒川百合 桜井揚子 早川俊 早川善樹 島田麗子 尼子ユリコ 大川聖恵 川上竹治 須佐美浩一 大川千萬 栗山義信 辻本敏子 山口佐栄子 前島素子 植田哲子 江野隆夫 青柳美智子 藤本典子 松本一郎 脇田正 山崎ホシ子 北山和民 今中喜子 前田忠男 東舞鶴聖パウロ教会シオン幼稚園 福堂佳子 張東煥 景山恭子 長野美代子 武市温子 藤谷正一 渡辺定夫 プール学院中高 宗教部 畑野栄一 木川田一郎 山本勝彦 大野和香子 小池俊男 春名英夫 泉迪子 ナザレ幼稚園 堺聖テモテ教会 婦人会 長田泰子 西村逸郎 大谷タカコ 林豊・崔七枝 竜田宏美 松原恵美子 小林哲也 桃山学院大学キリスト教センター 高松聖ヤコブ教会婦人会 恵我之荘聖マタイ教会 河野裕道 宇野徹 八木基督教会 東京聖マリア教会 首里聖アンデレ教会 平安女学院短期大学 渡辺晴男 横浜聖クリストファー教会 石橋聖トマス教会 堺聖テモテ教会 松原栄 池田稔 鈴木満紀子・恵 西宮聖ペテロ教会 逗子聖ペテロ教会 加納実 福岡教会 富山聖マリア教会 宗像聖パウロ教会 軽井沢ショー記念礼拝堂 新庄聖マルコ教会 小浜聖ルカ教会 千葉復活教会 橋本基督教会 目白聖公会 小出幸代 一宮聖光教会 聖アグネス教会 岡野利治 今村秀子 坪井崑久 磯晴久 聖マタイ幼稚園 葛飾茨十字教会 立教女学院 葉の花診療所

【一般献金】

加納実 山野繁子 大谷タカコ 松戸聖パウロ教会 大野寿美 立教女学院 三光教会 今村秀子 富山聖マリア教会聖マリア保育園 堺聖テモテ教会 佐世保復活教会 鄭早苗 宗像和雄・千代子 白倉一郎 第15回関東三教区日韓の歴史を学ぶ会信施金 聖公会九州教区婦人会 豊田英子 井出商店 高橋季代子 池ノ内隆二 金宮春子 森中央 古本純一郎 山根博子 高宮建治 小倉眞市 越賀昭夫 納トヨ 小林克則 谷富夫 阿部雅良 大音智恵子 巖篤子 特別養護老人ホームふれ愛の家 岡本勝 相原太郎 吉村元位 東光学園 橋本禮子 太田喜元 大嶋真砂美 康愛子 竹中まり子 江川みつえ 今村さだ子 小室一 神戸聖ミカエル教会 堀武 桃山基督教会桃山幼稚園 東直子 佐藤悦子 石田浩子 大阪聖愛教会 邑上太杞子 石橋泰治 八尾恵三 松本聖十字教会 淡川良子 特別養護老人ホーム神愛会愛の園シオン会 復活幼稚園 藤原紘子 鈴木ケイ 桃山学院高等学校 池袋聖公会 在日韓国研究所 中村四朗 真庭功 水戸聖ステパノ教会 石橋聖トマス教会 大阪教区連合男子会

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

○後援会費

年額 1口 3,000円 (個人)

1口 10,000円 (団体)

・郵便振込

00960-0-133429

「聖公会生野センター後援会」

□自由献金もよろしくお願いします

・郵便振込

00910-1-321780

「聖公会生野センター」

・銀行振込

三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311

「聖公会生野センター」

余 韻

■あの14歳の少年は、殺した小学生の男児を「野菜」と言っていた。野村証券の幹部たちは、普通のお客を「ゴミ」と呼んでいたそう。などなど、人を人と思えない人から、どれほど多くの人が、これまで犠牲になってきたことだろうか。無機質で乾き切った人の心に、重い吐息の今日この頃……。 (大)

■生野センター5周年公演は本当におもしろかった。また、これだけのことができてしまうセンターに、感動した。生野センターとの関わりの中で、多くのことを学んだ。(韓国語はちょっと...) これからもセンターを通して多くのことを考えていこう。そして10周年、今からわくわく楽しみにしている。何するんやろー。(恵)

■知ってました？前号のウルリムでReaderがLeaderになっていました。Lだと“指導者”Rだと“読本”です。日常生活でいかに英語から離れているか…という感じです。今年の夏も韓国から訪問研修者がたくさん来ます。よい交わりを期待しつつ、40になった我が身には少しキツイのも確かなことです。ボチボチと夏を乗り切るつもりです。(光)

■子どもの成長につれて夏の予定表の密度が変化してきました。以前なら、父親の突然の思いつきでも許されていた家族単位の遊び事は、「えーっ」という言葉とともに、むなしく霧散してしまう今年です。いよいよ子ばなれのときがきました。海水浴に行かなくてよいことを喜んでいいのか、複雑な心境のこの夏です。みなさんはいかがでしょう。(ハミ)

■前号の誤字脱字どうもすみませんでした。しっかり見ているつもりでも、わからないものですね。そう思うと、いつも読んでいる新聞や雑誌でも事実と違うように受け止めてることって少なくないように思います。多くの情報が飛び交う今、大切なことを見分けるアンテナをのばしていきたいです。(す)

■7月2日に米国が「未臨界核実験」を行ったというニュースを聞いた。核爆発がない核実験なので、核実験の禁止をうたった「包括的核実験禁止条約(1996年採択)」には違反していないと米国は強弁しているようだが、れっきとした核実験であり、核戦略体制の強化と維持がねらいであるのは明らか。全世界の共生体制強化のための妙案はないものか。力でなく対話を武器とするしかない。(テモチ)

ちょっとひと息③

열 번 찍어 아니 넘어가는 나무 없다(十伐之木)

10回切られて残る木はない

とても太い木であっても何回も切れば倒れるということ、とても心が強い人であっても何度もその心かされるとその心が動かされてしまうという意味。

発行所：聖公会生野センター

〒544 大阪市生野区小路東1-17-28

TEL 06-754-4356 / FAX 06-754-4357

e-mail cyj02040@niftyserve.or.jp

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄